［図書紹介］

中野　実　著『大学史編纂と大学アーカイヴズ』（『野間教育研究所紀要』第四五集）二〇〇三年三月　財団法人野間教育研究所

谷本宗生

本書は、二〇〇二年三月に急逝された東京大学史史料室の専任室員であった故中野実の遺稿、とくに大学史編纂及び大学アーカイヴズと大学史資料について、故人を偲ぶ中野実研究会（事務運営：米田俊彦財団法人野間教育研究所兼任所員）が実際に選定・編集を行い、故人が生前兼任所員を務めていた財団法人野間教育研究所日本教育史研究部門学校沿革史研究会から研究所紀要として刊行されたものである。

本書の編集作業の中心となったのは、中野実研究会のなかでも故人と大学史の領域で親交深い全国大学史資料協議会東日本部会の会員有志ら、西山伸（京都大学大学文書館・財団法人野間教育研究所兼任所員）・鈴木秀幸（明治大学史資料センター）・松崎彰（中央大学大学史編纂課）・桑尾光太郎（東京経済大学一〇〇年史編纂室）・日露野好章（東海大学課程資格教育センター）・谷本宗生（当時：日本大学文理学部）であった。西山・桑尾・松崎・鈴木の四氏は、本書の巻末でも所収掲載された原稿についてそれぞれ解説を記している。本書は故人の一周忌に合わせて刊行されたものであるが、編集の過程では掲載原稿の校正確認作業が思いのほか手間取り当初の計画遂行が危ぶまれることもあったようである。故人を慕うあつい思いが本書を予定とおり刊行させたといえよう。

本書の主な構成は、次のとおりである。

はしがき　寺崎昌男

第一部　大学史編纂

第一章　『東京大学百年史』を終えて

一　編集室の三つの委員会について

二　東京大学百年史の編纂過程とその問題点

三　新制大学史編纂の課題～『東京大学百年史』（通史三）の編纂を中心にして～

第二章　大学沿革史批評

一　『図説中央大学　一八八五↓一九八五』を読んで

二　『九州大学七十五年史』史料編（上、下）、通史、

別巻
三　『立命館百年史』通史一
四　学校史は広義の精神史～『関西学院百年史』に寄せて～
五　『学習院大学五十年史』上
第三章　『大学史をつくる』をめぐって
一　大学史の方法Ⅰ～第三〇回東日本大学史連絡協議会研究部会報告の概要～
二　実践案内～編纂のためのQ&A～
三　「『大学史をつくる～沿革史編纂必携～』編さんをめぐって」の報告を終えて
第二部　大学アーカイヴズと大学史資料
第一章　大学アーカイヴズをめぐって
一　大学史編纂と史料の活性化～東京大学史史料室の紹介～
二　東京大学史史料室
三　百年史編集室から大学史史料室へ～改組の経緯と現況を中心にして～
第二章　大学史資料論と資料紹介
一　大学史編纂と資料の保存～現状と課題～
二　大学史と大学史資料
三　立教学院の史料について
四　立教学院史編纂室の設置
五　明治時代の東京大学の写真
六　元総長古在由直関係資料
七　大学一覧について
八　沿革史料紹介～番外～
九　坪井九馬三文書について
一〇　史料紹介～番外2～『学生の栞』、『就職の栞』

解説　西山伸・桑尾光太郎・松崎彰・鈴木秀幸

著者略歴・主要業績

本書をつらぬく主要なテーマについて、「はしがき」で故人の立教大学院時代からの恩師にあたる寺崎昌男（財団法人野間教育研究所理事）が故人のライフ・ワークを「大学史づくりの技術体系」（一頁）と簡潔に称している。ただ、故人とまったく面識のないはじめて本書を手にした多くの読者にとっては、この言葉の意味するところは少し理解しづらいかもしれない。そこで、寺崎がいう「大学史づくりの技術体系」を本紹介者（谷本）なりに補足すれば、故人の大学史における活動領域を大きく以下の四つの側面から捉えて説明することができよう。

一つは、『東京大学百年史』全一〇巻（一九八四～一九八七年）をはじめとした大学史の編纂についてである。本書の第一部第一章のところで、東京大学百年史の編纂経緯等について故人が詳しく述べている。近・現代日本史における大学史の一つの編纂モデルとされる東京大学百年史に関するその編纂記録は、「特集　百年史編集をふりかえる」東京大学百年史編集室『東京大学史紀要』第六号

（昭和六二年三月）や寺崎昌男「大学文書の保存と活用を～『東京大学史紀要』の編纂体験に寄せて～」『プロムナード東京大学史』（一九九二年）など一部の回顧録を除くと、公的に後に残されたものは数少なくたいへん貴重であろう。

なかでも、「東京大学百年史の編纂過程とその問題点」（第一章二）は、専任室員としての責務から「いつも何かあせっていた、追われていたという感じ」（一八頁）を抱く一方で、「研究者の卵として、やはり学術的評価に耐え得るような沿革史を編纂したい」（一八～一九頁）と等身大の故人の思いや姿勢が率直に記されていて興味深い。

また、「新制大学史編纂の課題」（第一章三）では、『東京大学百年史』全一〇巻もいずれ「すべて、書き直されることを覚悟しなければならない」（四九頁）と真摯に捉えている。

二つめは、日本の大学アーカイヴズ関連施設の先駆とされた東京大学史史料室の業務運営についてである。本書の第二部第一章のところで、東京大学史史料室の業務運営について詳細に述べられている。東京大学史史料室は、一九八七年に『東京大学百年史』全一〇巻の刊行終了を受けて、東京大学史関係資料の恒常的な整理・保存・公開を目的として学内措置で事務局機構上に設立されたものである。東北大学記念資料室（一九六三年）とともに、故人の尽力もあって日本の大学アーカイヴズ関連施設の象徴的な存在となったといえよう。

大学史史料室の主な業務については、「百年史編集室から大学史史料室へ」（第一章三）のなかで、資料の収集・整理といった管理、学徒動員・出陣といったプロジェクトの企画遂行や史料室紀要の継続的な刊行などの調査研究、史料室ニュース刊行や展示活動といった広報から構成されると故人は捉えている。そのいずれの中心にも該当するものとして、目録・データベース化を挙げている。

そして、これからの史料室の重要な課題として、組織機構上の安定的な位置付けはいかにすべきか、「大学アーカイヴズの組織は新しい形態を考える必要がある」（一五八頁）と問題提起している。生前、この問題をめぐってさまざまな選択肢を模索検討していたであろう故人の苦悩する姿が垣間みえてくる。

三つめは、大学史関係資料に基づく大学史の調査・研究活動についてである。本書の第二部第二章のところで、大学史関係資料についてその概略が示されている。多様な形態や特徴をもつ大学史関係資料について、故人は次のような寺崎昌男による資料分類を大学史関係資料の可能性を模索する現状では妥当性もつものと援用している。

一、大学運営の歴史を示す公的文書、簿冊、事務記録、その他の文書。

二、大学内諸機関の議事録、意見書、答申、報告書等。

三、大学の刊行する年報、要覧、雑誌、新聞、広報紙誌等。

四、大学卒業証書、アルバム、講義ノート、伝記、書簡等々（とくに当該大学に関係あるもの）。

五、学長、学部長、教授、職員等の私蔵する文書類のうち、とく

に大学に関係するもの。

六、大学設立者、寄付者、卒業生など関係者の文書。

七、大学の歴史を示す記章、門標、記念品、トロフィー、旗、制服、制帽、印璽等々の物品。

八、大学に関する写真、テープ、ビデオテープ、フィルム等。

九、大学史に関する諸刊行文献。

一〇、学問史的な意味をもつ実験器具、研究室製作品、報告書等（一六六頁）。

実際に、故人が所属勤務した東京大学史史料室では、『文部省往復』などの大学法人文書や『東京帝国大学一覧』などの大学刊行物、加藤弘之や古在由直をはじめとした歴代総長などの個人資料、『卒業記念帖』などの写真アルバムなどを所蔵し公開している。それらの所蔵資料については、故人も中心となってその紹介や解説、復刻などが『東京大学史史料室ニュース』や『東京大学史紀要』で継続的に行われている。大学史関係資料の重要性を強調する故人が、晩年に博士論文のテーマとして着目して執筆した「帝国大学体制」の研究論文については、中野実研究会によって逝去後にまとめられた『近代日本大学制度の成立』（二〇〇三年）に所収されているので、そちらを参照されたい。

東京大学史史料室の業務運営に多くの時間や労力を費やしながらも、一方で大学史関係資料を実証的に調査・収集して考察分析するという堅実な作業によって、大学史・高等教育史研究を展開させようと意欲的に試みていたことがうかがえる。

四つめは、大学史の編纂及び大学アーカイヴズ（大学史関係資料の保存・活用）のネットワーク化についてである。『東京大学百年史』の編纂経験やその知見については、広島大学や北海道大学などの数多くの大学関係機関で故人は招聘されて積極的に講演活動を行っている。

たとえば、北海道大学では次のような希望を述べている。「北大に即して具体的な希望をいえば、北海道大学史の専門家を育ててほしい、ということである。私はこのことを機会あるごとにお願いしている。教育史、科学史、地域史、政治史など大学史の範疇は広く、深い。そのため、大学史に飛び込む研究者はめっきり少なくなっている。彼らが専心できるような体制、関係、励ましがほしい」（一五八頁）。

大学史に関する大学間をこえた「体制、関係、励まし」については、本書の第一部第三章のところにその一端が記されている。故人は「大学史に関する情報交換と研究、並びに会員相互の質的向上と交流をはかる」（全国大学史資料協議会第二条）全国的な組織、全国大学史資料協議会の活動運営に率先して参画し、その中心的な存在として大きな影響を与えていくことになる。

「沿革史編纂についてこれまで蓄積された技法や方法を、広く見渡し、確かめ、共有することはできないだろうか。また、教員、職員、理事者などが大学史をつくろうとする時、その最初の段階でつまずいたり迷ったりする労苦を、少しでもやわらげることはできないか。さかのぼって、そもそも大学史を編纂する目的は何なのかを、

お互いに理解し合うことはできないか」（一二八頁）という問題意識のもとで編纂された寺崎昌男・別府昭郎・中野実編『大学史をつくる〜沿革史編纂必携〜』（一九九九年）の報告会を全国大学史資料協議会東日本部会で行っている（第三章三）。その報告会での質疑応答をとおして、故人は「資料協議会の人々は、日々現場にて文書館の業務を遂行して、その在り方、将来像などに心を砕いている」（一三〇頁）と捉え、「今回は『沿革史編纂必携』であった。しかし『つくる』の編纂開始後の八年間に大学アーカイヴズの状況は大きく変化した。（中略）つぎには日本における大学アーカイヴズ必携を編纂することが、私の次の課題になる予感がある」（一三一頁）と述べている。

実際に、故人の意志を受け継いで全国大学史資料協議会東日本部会では、二〇〇五年三月刊行を目標にして『日本の大学アーカイヴズ』（仮称）の編集に着手し始めている。故人の思いは、今後も間違いなく継続され実践されていくことになろう。

なお、本書の頒布については、財団法人野間教育研究所（郵便番号一一二―〇〇一二、東京都文京区大塚二―八―三、電話番号〇三―三九四四―二四二一）が行っている。初めから大学史編纂及び大学アーカイヴズに関心を有するものに限らずに、できるだけ多くの方に手にとって読んでもらい、問題関心をよりひろく喚起し共有していく文献と位置付けたい。

（たにもと　むねお　東京大学史史料室室員）